

第64次南極地域観測隊に教員と学生の2名が参加 ～夏隊・萌芽研究観測：南極観測用ペネトレータの開発 発としらせ氷河および周辺域での集中観測～

【注目ポイント】

- ・高知工科大学からは2名が参加、教員は9年ぶり2度目の参加、学生の同行は開学26年目で初の選出です。
- ・2名が南極で携わる研究は、地震計などを搭載した「ペネトレータ」と呼ばれる先端の尖った貫入装置(直径10センチ、全長60センチ、重さ約10キロ)を設置し、地震活動や氷河の崩落などの動きを把握するための適切な実験場所を選定することです。
- ・観測器には、他の研究機関の各種センサーと一緒に本学が開発したインフラサウンドセンサーも搭載され、南極地域での運用試験や氷河の観察を行う予定であり、上空から落下させて地表(氷)に差し込む方法で設置する計画です。

6月24日、政府の南極地域観測統合推進本部は、第64次観測隊の隊員64名を発表し、システム工学群の西川 泰弘助教が夏隊の研究観測(萌芽研究観測)の隊員として参加することが決定しました。また、10月31日には、大学院修士課程 航空宇宙工学コース 1年の山本 耕大さんが同行者として選出されました。

2名は、宇宙科学研究所(ISAS)の田中 智教授が代表を務める「南極観測用ペネトレータの開発としらせ氷河および周辺域での集中観測(萌芽研究観測)」のメンバーとして参加します。このプロジェクトは、南極などの温度・環境・観測システムを設置するには障害や危険が数多く存在している地域において、自然現象を観測するシステムを効率的かつ経済的に整備するため、「観測できる場所での観測」ではなく、「観測したい場所での観測」を実現するための技術開発を目的としています。



(本学で実施した事前実験の様子／下段：西川泰弘助教、上段：左から山本真行教授、山本耕大さん、宇宙科学研究所 田中智教授、株式会社SOOM CEO 阿久津岳生氏)

これまで人の到達が難しかった「白瀬氷河」にて、氷河の流動に伴って発生する地震動やインフラサウンドを的確にとらえることによって、氷河の状態や運動を精密に解明することが期待されています。また、南極での観測システムが整えば、崩落した氷河の規模などから地球温暖化の現状を把握することにもつながり、将来的には地球のみならず他の星での観測の応用も期待されています。

西川助教と山本さんが所属する夏隊は、11月11日に南極観測船「しらせ」で日本を出発し、昭和基地に向かいます。南極での行動日数は99日で、来年3月22日に日本に帰国する予定です。



【広報に関するお問い合わせ先】

高知工科大学 入試・広報課 岡花、石川
TEL.0887-53-1080
E-mail : kouhou@ml.kochi-tech.ac.jp